



書評同人

**苅部 直**

Tadashi Karube

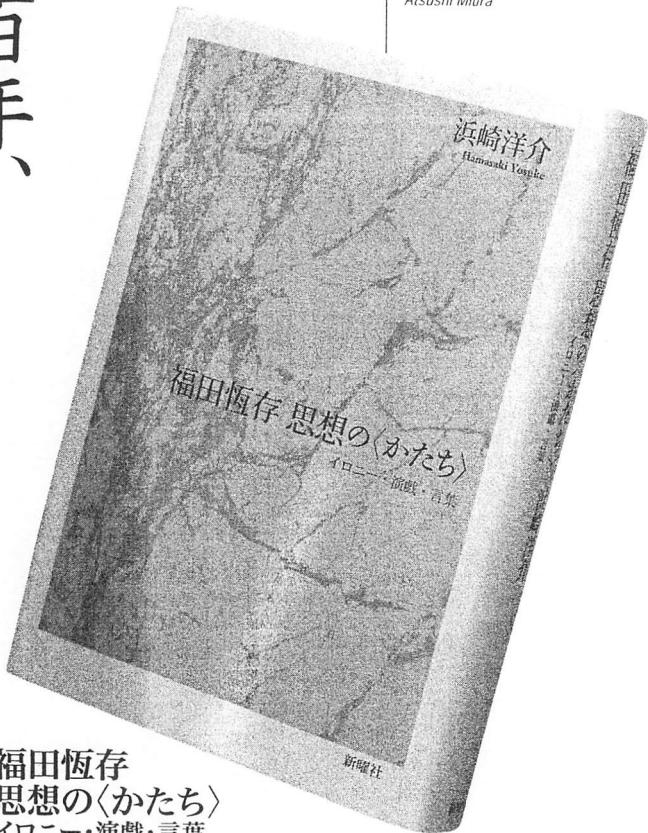
**鴻巣友季子**

Yukiko Konosu

**三浦 展**

Atsushi Miura

# 福田恒存生誕百年、 色褪せぬその魅力。



**福田恒存  
思想の<かたち>**  
イロニー・演戯・言葉

浜崎洋介／新曜社／4095円

## 三浦 展

消費社会研究家

意外に聞こえるかもしれないが、私は福田恒存の信奉者である。信奉者という言い方は適切でないかも知れないが、相当影響を受けている。

しかしそもそもは、福田と私の「思想」は——私こそきにも「思想」があるとして——相反するものだった。やや左翼系の家庭に育ち、朝日新聞で「進歩的文化人」的な言説を読んで育ち、平和主義、護憲主義だった私にとって福田は論

駁すべき対象だった。私の学生時代、福田は日曜朝のフジテレビで「世相を斬る」という対談番組を持つていて、それを毎週見ていた私は、なんて意地の悪い男だろうと思いつながら、しかしながら

なぜ平和憲法が悪い? 福田の論理の隙を探し、そこを突いて攻撃しようと思つた。しかし福田の文章には、剣豪の構えのように、つけいる隙がなかつた。それどころか、その構え自体が、背筋が伸びて、凜として美しかつた。また、「人間・この劇的なるもの」の表紙カバーに付けられた福田の顔写真を見て、この男

介は一九七八年生まれ。私が「世相を斬る!」を見ていた頃の生まれだから、福

田は日曜朝のフジテレビで「世相を斬る」という対談番組を持つていて、それを毎週見ていた私は、なんて意地の悪い男だろうと思いつながら、しかしながら

なぜ平和憲法が悪い? 福田の論理の隙を探し、そこを突いて攻撃しようと思つた。しかし福田の文章には、剣豪の構えのように、つけいる隙がなかつた。それどころか、その構え自体が、背筋が伸びて、凜として美しかつた。また、「人間・この劇的なるもの」の表紙カバーに付けられた福田の顔写真を見て、この男

介は一九七八年生まれ。私が「世相を斬る!」を見ていた頃の生まれだから、福

田は日曜朝のフジテレビで「世相を斬る」という対談番組を持つていて、それを毎週見ていた私は、なんて意地の悪い男だろうと思いつながら、しかしながら

田の現役の姿は見たことがないだろう。

そういえば、「第三文明」で「現代の古典特集」をしたとき、選者の一人であつた私は「人間・この劇的なるもの」を十冊のうちの一冊として選んだのだが、もう一人、同書を選んだのが若き政治学者、中島岳志だつた。中島は一九七五年生まれ。浜崎と同世代である。こうした若い世代が福田を研究したり、惹かれたりすること自体が私には興味深い現象である。一九八〇年代後半以降、福田の言説が再評価されるようになつてきたが、浜崎自身が言うように、「その背景には、冷戦の雪解けムードのなか」「イデオロギー規定的な言説（マルクス主義、進歩主義、近代主義）が次第に後退するといった時代の後押しがあつたことも確かであり、かつては「ベストのごとく」嫌われた福田を若い世代は偏見なく読むことができるようになったのである。

偏見なく読めば、孫ほどの世代をも惹きつける、その福田の魅力とは何か。それはおそらく、国家、社会、時代、あるいは「空氣」というものに対しても、個人はいかに立ち向かうべきかということである。逆説的に言えば、今という時代は個人が空中に放り出されたような時代である。地域社会、歴史、伝統、会社、家族から切り離され、あるいは経済成長

や近代化という国民共通の目標をなくし、グローバリゼーションが猛威をふる

うことで日本という国の固有性すら危ぶまれているような時代の中で、木の葉のように舞つてゐるのが現代人だ。それで、もなお、人間が、空氣に流されず、時代におもねることなく、個人を確立できるか、その問題を多くの人々が共有しているのが現代なのであり、そのとき福田の「生き方」「歩き方」が大きな指針となるのである。

なお、同書の膨大な「注」は、それだけを読んでも面白いものである。「附合ふといふ事」などの「比較的短く肩の力が抜けたエッセイ」や「福田の『人間味』ある人物論の方にこそ『福田恒存の心がもつとも感じられる』」という一文を「注」に見つけ、我が意を得た。福田を読み込み、すばらしい研究を成し遂げた浜崎に拍手を送りたい。



## 反・幸福論

佐伯啓思/新潮新書/777円

ような思考がありました」と書くあたりは福田的と言えようか。

福田の文章を浜崎は引用している。

「将来、幸福になるかどうかわからぬか、そのためには何をすればいいのか、また『よりよい平生生活』が訪れるなど

うかわからない、が、自分はこうしたい

し、こういふ流儀で生きてきたのだから

ら、この道を探る—そういう生きかた

があるはずです。いはば自分の生活や行動に筋道をたてようとして、そのためには

ちを犯しても、「不幸」になつても、そ

れはやむをえぬといふことです。さうい

うな思考がありました」と書くあたりは福田的と言えようか。

ふ生きたたは、私たちの親の世代までには、どんな平凡人のうちに、わずかながら残つておきました。この自分の流儀と自分の欲望とが、人々に自信を与えてゐたのです

一見古めかしい幸福論だが、こうした「反・幸福感」は、実はこれから「衰退」する日本を生きていかねばならない浜崎、中島らの世代には自然に身についているように私には思える。その点については拙著『第四の消費』で触れたので、お読みいただければ幸いである。●

「反・幸福論」は、実はこれから「衰退」する日本を生きていかねばならない浜崎、中島らの世代には自然に身についているように私には思える。その点については拙著『第四の消費』で触れたので、お読みいただければ幸いである。●